

イエメン情勢クォーターリー（2023 年 10 月～12 月）

——国際社会に拡大するフーシー派の脅威と海洋軍事活動の活発化

理論研究部社会・経済研究室 研究員 吉田 智聡

理論研究部社会・経済研究室 研究員 清岡 克吉¹

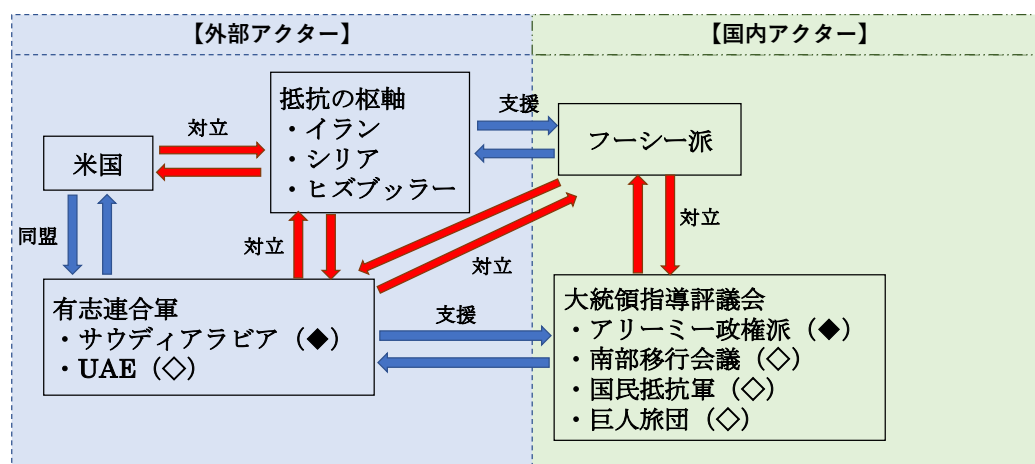
エグゼクティブ・サマリー

- ◆ フーシー派は 10 月 7 日以降のイスラエル・パレスチナにおける武力衝突に際して、パレスチナ支援を掲げて軍事活動を開始した。攻撃対象はイスラエル本土と、紅海・アラビア海を航行するイスラエル関連船舶およびイスラエルに向かう船舶である。この他にサウディアラビアとの和平合意が妥結するとの見方が広がったものの、本四半期には実現しなかった。
- ◆ アリーミー政権派は東部諸県でのサイクロン被害を受けて、大統領がマフラ県を前四半期から連続して訪問する形となった。軍事面では参謀総長に対する実行犯不明の暗殺未遂事件が発生した他、参謀総長がハッジャ県や紅海島嶼部に展開する沿岸警備隊部隊を巡閲した。
- ◆ 南部移行会議は今次のイスラエル・パレスチナ情勢に際して、沈黙を貫いており、イエメン諸勢力の中で最もイスラエル寄りの姿勢を示した。またズバイディーはイスラエルによる南イエメンの民族自決権承認と引き換えに、紅海航路庇護のための用意がある旨の発言をした。
- ◆ 国民抵抗軍はフーシー派の海洋軍事活動に対抗し、密輸拿捕などの成果を挙げた。同組織は幹部等を通して海軍や沿岸警備隊に一定程度の影響力を有しているとみられる。またこれまで同様に西海岸地域の支配強化が目指され、ターリク・サーレハは正式開業が目指されるモカ空港を視察した。

（注 1）本稿のデータカットオフ日は 2023 年 12 月 31 日であり、以後に情勢が急変する可能性がある。

（注 2）フーシー派は自身がイエメン国家を代表するとの立場をとるため、国家と同等の組織名や役職名を用いている。本稿では便宜的にこれらを直訳するが、これは同派を政府とみなすものではない。

【図 1：イエメン内戦におけるアクターの関係】



（注 1）大統領指導評議会の中で、サウジアラビアの代理勢力と評される組織を（◆）、UAE の代理勢力と評される組織を（◇）とした。

（注 2）代表的なアクターを記載した図であり、全てのアクターを示したわけではない。

（出所）吉田作成

フーシー派：対イスラエル戦争の成果と国際社会の対応

フーシー派は 10 月 7 日以降のイスラエル・パレスチナにおける武力衝突に際して、パレスチナ支援を掲げて軍事活動を開始した。以下では、別論考のデータカットオフ日であった 11 月 5 日以降の同派の動きや国際社会の反応について整理したい²。

イスラエル南部エイラートへの頻繁な航空攻撃に加え、フーシー派は 11 月 9 日に米軍のドローン「MQ-9 リーパー」を撃墜した³。米軍も撃墜を認めたものの、それがイエメン領海上であったか公海上であったかという認識には食い違いが見られる。国際社会にとってより差し迫った脅威である紅海での軍事活動については、米国中央軍の発表によれば、11 月 19 日から 12 月 31 日までの国際物流への攻撃は 23 回に及んだ⁴。諸攻撃の中でも、11 月 19 日の日本関連船舶「ギャラクシー・リーダー」の拿捕が耳目を集めた。フーシー派海軍司令官ムハンマド・アブドゥンナビー（Muhammad ‘Abd al-Nabī）は同船舶の乗組員を「イエメンの客人」と表現⁵しており、家族との連絡など最低限の接触は許可されている模様である⁶。乗組員はフィリピン、ブルガリア、ルーマニア、ウクライナ、メキシコ国籍であり、各国がイランやサウジアラビアを介して解放交渉を進めてきた。12 月 29 日には解放実現が間近であるという報道も出ている⁷。船舶本体については、本稿執筆時点でホデイダ県北部の港湾部サリーフ沖南方に停泊しているとみられる⁸。これは船舶自動識別装置（AIS）から得られた情報であり、フーシー派が AIS

を切断せずに、国際社会に船舶の位置を知らしめようとしていることを意味する。前述の乗組員を客人として扱う発言なども含め、自派が国際社会の敵ではなく、イスラエルと戦っているという主張に沿った行動を示したい思惑があると考えられる。

海洋面での軍事活動に関して、フーシー派の攻撃対象は徐々に拡大してきた。当初はイスラエル関連船舶として紅海を航行する①イスラエル旗掲揚、②イスラエル企業運営、③イスラエル人所有のものが標的とされていた。しかし 12 月 4 日に活動範囲がアラビア海に拡大⁹され、さらに同月 10 日にイスラエルに向かう船舶であれば国籍を問わない方針が示された¹⁰。実際にはイスラエルに向かっていなかったとされる船舶への攻撃も看取されており、英国石油大手 BP 社など紅海での運航を停止する企業が増加している。前述したエイラートへの航空攻撃の影響も併せて、イスラエルで唯一の紅海に面した貨物ターミナルであるエイラート港は 85% 活動が縮小した¹¹。フーシー派は自身を紅海における「安全弁」と表現しており、イスラエルに対する経済戦争は成果を挙げていると評価できる。

イスラエルを強固に支持する米国は、紅海の航行の自由確保を大義として、12 月 18 日に多国籍枠組み「繁栄の守護者」作戦の創設を発表した¹²。当初同作戦への参加を表明したのは英国、カナダ、フランス、イタリア、オランダ、ノルウェー、スペイン、セーシェル、バハレーンであり、後にギリシャと豪州の参加も発表された。米国防総省の発表によれば米国を含め 20 カ国以上が参加していることから、8 カ国以上が非公開で参加している。またフランスは自国の指揮下で、スペインは NATO もしくは EU 主導の共同作戦にのみ参加するという立場を示すなど、参加国の中には米国主導のイニシアティブに一定の距離を保とうとする動きも見られる¹³。こうした一因として、欧州各国が国内の反イスラエル世論の高まりを考慮している点が指摘されている他、フーシー派が米国のパートナーも敵視する姿勢を明らかにしていることが挙げられよう。多国籍枠組みが十分に機能するか疑問が残る中、米軍は 12 月 31 日にフーシー派海軍と交戦し同派戦闘員を 10 名殺害、3 隻の舟艇を沈没させた。また同日に米英はイエメン空爆の用意をしていると報じられた¹⁴。仮に米英の独断で空爆が行われれば、後述するように政治的解決が模索されているイエメン情勢は後退を余儀なくされる。

国際社会の懸念に対し、フーシー派の認識は正反対のものである。同派は米国こそが紅海の軍事化を進めっていると主張した上で、「イスラエルがガザ地区への侵略を停止するまで、自軍がイスラエル攻撃を継続する」という従来の立場を堅持している。紅海でのエスカレーションの責任を米国に転嫁する点は別として、パレスチナ支援のための軍事行動という言説は、中東諸国の民衆単位では一定の支持を得ている可能性がある。例えばワシントン近東政策研究所の調査によれば、2023 年 8 月時点で 10% に過ぎなかったサウディアラビア人のハマースへの好感度は、同年 10 月～11 月に 40% にまで急伸した¹⁵。パレスチナ系難民の人口に占める割合が高いヨルダンでは、ハマースを肯定的に捉えるという回答は 85% にも上る。以上のようにアラブ諸国では国内世論の関係から、ハマースを支援するフーシー派に対して敵対的な行動を公には取りにくい環境が醸成されていると考えられ、「繁栄の守護者」作戦への参

加を認めているアラブの国はバハレーンのみである。なおイスラエルと国交を有するバハレーンでは、政府によるパレスチナ連帯デモ参加者の逮捕が報告されており、イスラエル寄りの姿勢が窺われる¹⁶。

フーシー派・サウディアラビア間の和平交渉も、イスラエル・パレスチナ情勢の影響を受けているとみられる。11月16日には地元有力紙『アデン・ガド』編集長は、6カ月の停戦合意が1週間以内に署名されると『X』に投稿した¹⁷。同人物は合意内容として給与支払いや空港開放に加え、戦争終結の政治的解決に達するための政治対話委員会設立が含まれると述べた。同日にスルターン・アラダ（Sultān al-‘Arāda）を除く大統領指導評議会メンバーがサウディアラビア国防大臣ハーリド・ビン・サルマーン（Khālīd bin Salmān）と会合したこともあり、イエメンウォッチャーの間でも和平合意実現の可能性が俄かに取り沙汰された¹⁸。また米国がフーシー派抑止のための多国籍枠組みを検討する中、12月7日にサウディアラビアは米国に自制を求めたとされる¹⁹。サウディアラビアはイスラエル・パレスチナ情勢がイエメン問題にまでスピルオーバーすることを恐れているとともに、米国が取り得る軍事介入の烈度ではフーシー派を軍事的に抑え込めないと考えている可能性がある。前述した空爆が行われれば、サウディアラビア主導の有志連合軍が2022年4月以来停止してきたイエメンへの空爆が再開されることになり、イエメン内戦の政治的解決は一層遠のくことになる。また軍事的観点からも、山岳歩兵を中心として、（2015年から2022年までの）7年以上有志連合軍からの苛烈な空爆に耐えてきたフーシー派を航空攻撃だけで抑止できるとは考えにくい。米英としてはフーシー派が強度の海洋軍事活動を行えない程度までの攻撃に留める思惑があるかもしれないものの、それが可能か不明である上、更なるエスカレーションが起きることは不可避な状況にある。フーシー派が明確に国際社会の脅威となっている点は事実であるが、米英は過去に軍事的解決を求めたイラクやアフガニスタンでの事態の経過とその結末を今一度冷静に分析し、長期的な視点に立った政策と実行が求められるのではなかろうか。

【図2：本四半期の一枚（ギャラクシー・リーダー拿捕と同船舶を視察するアーティフィー国防大臣）】



（出所）Wikāla al-Anbā' al-Yamanīya より引用²⁰

アリーミー政権派：参謀総長の暗殺未遂

大統領ラシャード・アリーミー（Rashād al-‘Alīmī）は、10月下旬にイエメン東部に上陸したサイクロン“TEJ”の被害視察のために東部マフラ県を訪問した。同月28日にマフラ県知事およびハドラマウト県知事との会合が実施され、対応が協議された²¹。また11月28日にアリーミーはドバイに到着し、南部移行会議最高指導者アイダールス・ズバイディー（‘Aydārūs Qāsim al-Zubaydī）とともに国連気候変動枠組条約第28回締約国会議（COP28）に参加した。アリーミーはCOP28演説にて、前述のサイクロン“TEJ”について触れつつ、気候変動課題への対峙の世界的な減速に警鐘を鳴らした²²。

軍事面では、11月7日に参謀総長サギール・ビン・アズィーズ（Ṣaghīr bin ‘Azīz）に対する暗殺未遂事件が発生した²³。マアリブ県への帰任の際を狙った自動車爆弾攻撃であり、参謀総長は無事であったものの、随行員3名が負傷したとされる。国防省は実行犯の調査を命じたとされるが、本稿執筆時点では続報はない。またアリーミー政権派も海洋面で活動を行っている。10月18日にはわが国の防衛駐在官が沿岸警備隊長官と二国間関係強化などについて議論したと報じられた²⁴。同月下旬には、参謀総長がハッジャ県ミーディー港²⁵および紅海島嶼部に駐留する沿岸警備隊部隊を視察した²⁶。なお政権側沿岸警備隊（アデン管区）のFacebook投稿（11月25日）を見ると、巡視艇の保有も確認される²⁷。

南部移行会議：イスラエル寄りの姿勢の堅持

南部移行会議は、フーシー派の海上軍事活動を利用して南部独立を追求する動きを見せた。12月9日にズバイディーは海軍司令官と会談した²⁸。また同日には南部移行会議の軍事部門「南部軍」の公式報道官ムハンマド・ナキーブ（Muḥammad al-Naqīb）が、バーク・マンデブ海峡およびアデン湾の海洋航路の安全・安定性保護において実効的かつ機軸的な協力を行う準備ができている旨の発言をした²⁹。同月11日にはイスラエルによる南イエメンの民族自決権承認と引き換えに、南部移行会議が紅海航路庇護のために協力する用意がある旨を表明したと報じられた³⁰。ズバイディーは2021年時点でロシア国営テレビ『RT』のインタビューで、将来の南イエメン国家がイスラエルと国交正常化することは可能であると述べている³¹。こうした経緯からも明らかなように、南部移行会議は今次のガザでの衝突に際してもイスラエルを非難しておらず、南部軍公式サイト『南の盾』等でもイスラエル・パレスチナ情勢は一切報じられていない。他勢力がイスラエル非難を展開する中、南部移行会議は自組織の利益最大化を目標として、最もイスラエル寄りの姿勢を示したといえる。

国民抵抗軍：海洋面での軍事活動とモカ空港の開発

フーシー派の軍事活動の活発化に合わせて、国民抵抗軍の海洋面での軍事活動も活発化した。10 月 11 日にホデイダ県南部ファーザ沖でフーシー派と連合抵抗軍³²の衝突が発生した他、同月 16 日に最高指導者ターリク・サーレハ（Ṭāriq Muḥammad Ṣāliḥ、以下 T.サーレハ）が沿岸警備隊長官と会談した³³。その後同月 23 日³⁴、および 12 月 23 日に沿岸警備隊がタイズ県西部で密輸の阻止に成功した³⁵。沿岸警備隊紅海方面司令官アブドゥルジャッバール・ザフズーフ（‘Abd al-Jabbār al-Zaḥzūḥ）は国民抵抗軍幹部であることから、国民抵抗軍は沿岸警備隊に一定程度の影響力を有しているとみられる。12 月 12 日には T.サーレハが沿岸警備隊および海軍旅団の教育年次修了式に出席した³⁶。なお、T.サーレハやザフズーフに加え、海軍歩兵第一旅団司令官ブハイジー・ラマーディー（Buhayjī al-Ramādī）が同行事に参加したと報じられたが、ラマーディーも国民抵抗軍幹部とみられる³⁷。国民抵抗軍の海軍力はフーシー派と比べて小さなものであるが、モカなど紅海南部での活動が可能であるため、今後の動向が注目される。

12 月 4 日に T.サーレハはモカ空港を視察し、正式な開業や、同空港発着の国内・国際民間航空便の運航開始に向けた最終調整が進められた³⁸。国民抵抗軍は西海岸地域支配を開始した 2018 年以降、モカ港付近で空港の開発を進めてきた。その動機は、国民抵抗軍の支配地域において国外や長距離の移動に有効に運用できる空港がなかったためとみられる。以下では同空港の開発の推移について、Google Earth の「航空写真」や国民抵抗軍の政治声明や報道を基に分析を試みる³⁹。また、開発中のモカ空港の現状を空中画像から分析し、将来の拡張計画を指摘した上で、どのような運用を目指しているのかを概況ではあるが示したい。

まずモカ空港の整備状況を航空画像の時系列分析によって確認する [図 3 参照]。これらの画像は 1 枚目から順に、①2018 年 5 月 5 日、②2019 年 9 月 25 日、③2023 年 1 月 27 日、④2023 年 3 月 15 日に取得されたものを時系列順に並べたものである。民間の航空画像サービスである Google Earth を利用した簡易的なものであるため、これらの画像の中には、撮像のチャックによって取得時期が一致しないものがあるが、大まかな動きを分析することを目的とするため、本稿においては該当部について適宜明示の上で活用したい。

時系列の変化として大きく見て取れるのが、2018 年から 2019 年の間である。2019 年 9 月撮影の写真では、砂洲にそれまでになかった滑走路の基礎部分とみられる埋立地が出現した。これは国民抵抗軍がモカを含むイエメン西部を支配した時期と合致する⁴⁰。2022 年 11 月 25 日には同空港において初となる航空機が着陸した⁴¹。これに先立つ同年 11 月 24 日には空港建設の「第 2 段階」の起工式が行われていることから、およそ 2018 年から 2022 年 11 月までが安定した滑走路のみを建設する工期の「第 1 段

階」であったとみられる⁴²。続く第 2 段階では写真 B で示した管制塔や、旅客ラウンジなどの建設が行われた⁴³。

2023 年 1 月 25 日からは工期の「第 3 段階」が開始されている。この第 3 段階は、図 4-2 で示した滑走路の 3,000m への拡張を指すとみられ、国民抵抗軍が報道で示したようにより多くの燃料や人員を積載した状態でも離陸できることを目指したものであろう⁴⁴。また中東地域のような高温な環境では空気の密度が低くなるため、より長い滑走距離が必要となることも考えられる。また、第 3 段階の滑走路埋め立ても 1 月の着工から 3 月までの 2 か月でその輪郭を表している [図 3 参照]。このことから、約 4 年を要した第 1 段階に比べて、第 2 段階や第 3 段階の工事進度が極めて速いことも指摘できる。

時系列での概観の比較に続いて、上空画像と公開情報からモカ空港の詳細を分析する。本稿執筆時点では最新版にあたる 2023 年 3 月時点の航空写真で確認すると、滑走路とその周辺の施設から成ることが確認できた。2023 年 3 月時点（「第 1 段階」工事終了）では、長さ約 2,300m、幅約 45m の滑走路を有する空港である。その規模から、滑走路単体で見ればジェット旅客機を運用する基準を満たしているといえる⁴⁵。これは、航空機の離陸の滑走距離としてボーイング 737 など小型ジェット機は約 1,800m、ボーイング 767 などワイドボディ機は約 2,000m、ボーイング 747 などの大型機は 3,000m 程度が必要⁴⁶ということからもわかる⁴⁷。加えて報道ベースではあるが、赤十字が運用するエンブラエル社製の ERJ-145 型機（最大離陸重量で 2,270 m の滑走路が必要）が本空港から離着陸した。しかし 2023 年 3 月時点での滑走路の航空写真や映像からは、航空機がオーバーランをした際に必須の設備となる「過走帯」が設置されていなかったり、「ターニングパッド」が世界的にもあまり見られない特徴を有していたりするなど、運用上疑問符が付く点が散見される [図 4-1 参照]。また砂州に建設されていることから、大規模な駐機場の拡張にはコストがかかると考えられる。ただし先述のターニングパッドであるが、工期の第 3 段階の途中とみられる滑走路南端側の延伸部分の画像（写真 C）では、南端部のみ図 5 のような一般的な形状に施工されているのが確認でき、過走帯も僅かながら確保されている⁴⁸。これらの措置については、2023 年 2 月に T.サーレハが最も厳格な国際基準と仕様を遵守する必要性を強調したことに影響を受けている可能性もあろう⁴⁹。この他に前述した 2023 年 12 月の T.サーレハの視察では、写真 A のようにほぼ完成したターミナルの様子も公開されており、支配地域の開発が進んでいる。

【図 3：時系列でのモカ空港周辺開発状況】

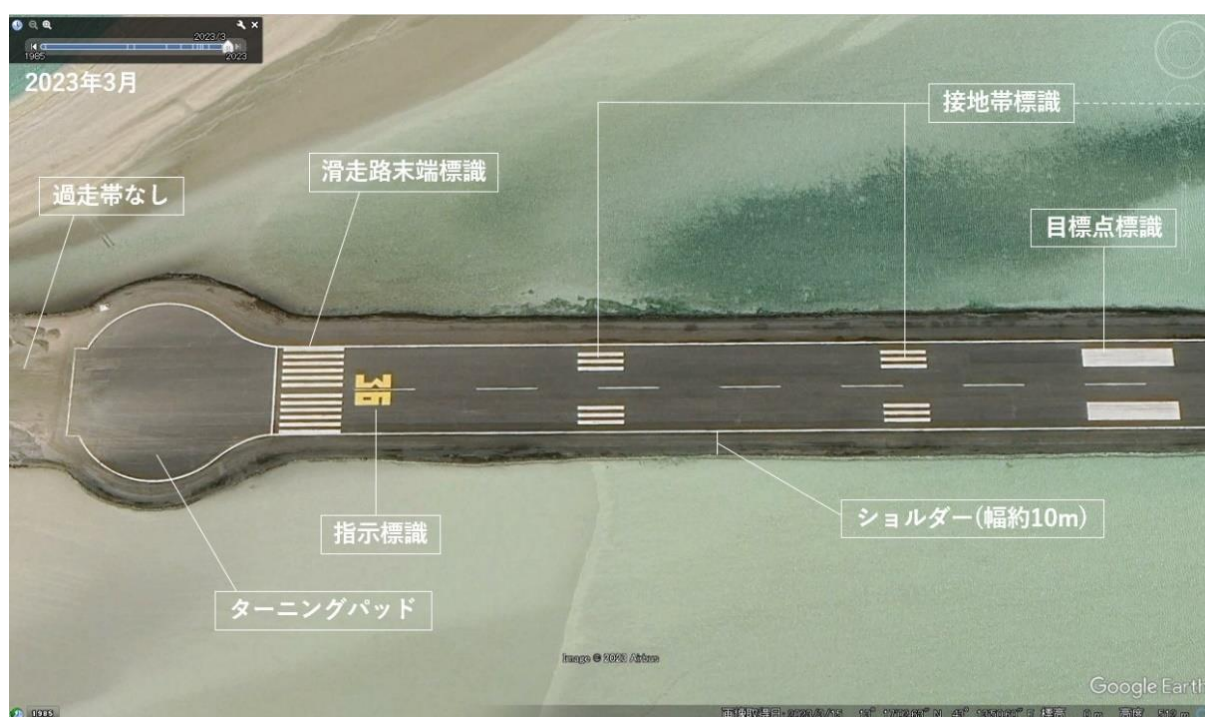


(注 1) 撮像のチャンクによって取得時期が一致しないものがある。

(注 2) 画像取得日は各記載の通り。

(出所) Google Earth を基に清岡作成

【図 4-1：モカ空港滑走路の詳細航空写真】



(出所) Google Earth を基に清岡作成

【図 4-2：モカ空港滑走路の全長と全幅、および延長が見込まれる距離】



(出所) Google Earth を基に清岡作成

【図 5：一般的なターニングパッド】

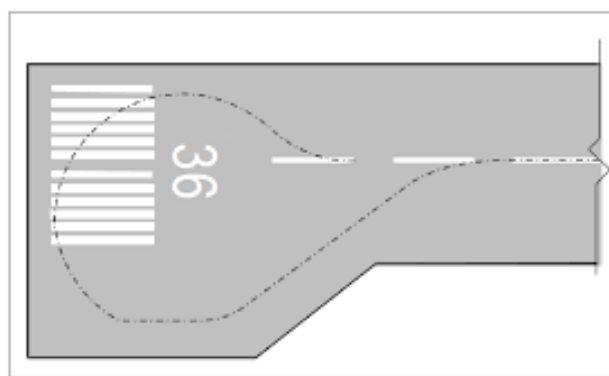


Figure 1-3. Turnarounds (cont.)

(出所) 国際民間航空機関 (ICAO) より引用

【図 6：国民抵抗軍が公表したモカ空港の様子（画像 A,B,C）】



(出所) Wikāla al-Thānī min Dīsambir より引用

その他：2023 年のイエメン情勢を回顧して

2023 年のイエメン情勢を総括すると、内戦終結へ向けた交渉妥結の希望が幾度か持たれたものの、実現することはなかった。まず同年 3 月のイラン・サウディアラビア国交正常化合意が、イエメン内戦の終結に寄与すると言われた。この合意ではイランによるフーシー派への兵器供与停止が約されたとも言われるが、前述した国民抵抗軍による密輸阻止など、実際には兵器供与が続いているのではという見方が強い。翌 4 月には捕虜交換およびサウディアラビア代表団のサナア訪問が実現し、サウディアラビアの 3 段階の和平合意案が報じられた。しかし、その後水面下での接触は続いていたものの 8 月頃まで交渉の具体的な進展は見られなかった。また 8 月から 9 月にかけて交渉が再度前進するも、10 月からフーシー派が対イスラエル軍事介入を開始し、妥結間近とみられた和平合意は年内には実現しなかった。政治的解決が近づいては遠のく、もどかしさを感じる 1 年であったといえよう。

大統領指導評議会については、内戦終結という文脈ではむしろ悪化した側面がある。サウディアラビアが内戦から撤退した後、フーシー派と交渉を行うのは大統領指導評議会である。その際にバーゲニング・パワーを強める上で、反フーシー派諸勢力が大統領の下で一致していることが望ましいであろう。しかし 2023 年 5 月に副大統領ファラジュ・バフサニー（Faraj al-Bahsani）および副大統領のアブドゥッラフマーン・ムハッラミー（‘Abd al-Rahmān al-Muḥarramī, 通称「アブー・ザラア」）が南部移行会議副議長に指名された。南部移行会議はハドラマウト県の支配拡大を企図して、同県都ムカッラーを拠点に、同県北部のサイウーンを中心とするアリーミー政権派と勢力争いを繰り広げた。他方でアリーミー政権派は大統領直轄部隊「祖国の盾」創設や東部訪問などを通して、南部移行会議を抑制する動きを見せた。国民抵抗軍は自組織の勢力拡大・地方支配強化に邁進しており、モカ空港の一部運用開始など成果を挙げたといえる。すなわち、フーシー派との衝突が小康状態にある中、大統領指導評議会内での抗争や自組織を最優先する状態が続いた。大統領指導評議会の一体性の欠如は、反フーシー派諸勢力の致命的な問題であり、改善の兆候は見られていない。

2023 年は恐らく、わが国でイエメンないしフーシー派が耳目を集めた年であった。この注目はイエメン内戦の文脈ではなく、前述した日本関連船舶拿捕事件という、イスラエル・パレスチナ情勢の文脈で起きたといえよう。しかし日本イエメン友好協会の「グローバルフェスタ JAPAN 2023」出展など、それ以前からイエメンに関連した活動が多数実施され、日本のイエメン関係者にとって充実した 1 年であった。2024 年も旺盛な情報発信・国際協力活動が期待され、研究者・実務家の垣根を超えた協働が求められるといえよう。

「イエメン情勢クォーターリー」の趣旨とバックナンバー

アラビア半島南端に位置するイエメンでは、2015 年 3 月からサウディアラビア主導の有志連合軍や有志連合軍が支援する国際承認政府と、武装組織「フーシー派」の武力紛争が続いてきた。イエメンは紅海・アデン湾の要衝バブ・マンドブ海峡と接しており、海洋安全保障上の重要性を有している。しかしながら、イエメン内戦は「忘れられた内戦」と形容され、とりわけ日本語での情勢分析は不足している。そのため本「イエメン情勢クォーターリー」シリーズを通して、イエメン情勢に関する定期的な情報発信を試みる。

◆ バックナンバー

吉田智聡「[8 年目を迎えるイエメン内戦ーリヤド合意と連合抵抗軍台頭の内戦への影響ー](#)」『NIDS コメンタリー』第 209 号、防衛研究所（2022 年 3 月 15 日）。

——「[イエメン情勢クォーターリー（2023 年 1 月～3 月）ーイラン・サウディアラビア国交正常化合意の焦点としてのイエメン内戦？ー](#)」『NIDS コメンタリー』第 258 号、防衛研究所（2023 年 4 月 20 日）。

——「[イエメン情勢クォーターリー（2023 年 4 月～6 月）ー南部分離主義勢力の憤懣と「南部国民憲章」の採択ー](#)」『NIDS コメンタリー』第 266 号、防衛研究所（2023 年 7 月 18 日）。

——「[イエメン情勢クォーターリー（2023 年 7 月～9 月）ー和平交渉の再開とマアリブ県で高まる軍事的緊張を読み解くー](#)」『NIDS コメンタリー』第 266 号、防衛研究所（2023 年 10 月 19 日）。

¹ 本稿では国民抵抗軍の節における航空写真分析を清岡が担当し、それ以外の部分は吉田が執筆した。また、航空写真分析の本文で引用したアラビア語報道等についても、誤認や誤訳があった場合、その責任は吉田に帰する。

² 10 月 7 日から 11 月 5 日までのフーシー派の動向や、同派の軍事能力については以下を参照されたい。

吉田智聡「イスラエル・パレスチナ情勢に揺れる中東政治ー「抵抗の枢軸」の介入の行方と GCC 諸国の温度差ー」『NIDS コメンタリー』第 280 号、防衛研究所（2023 年 10 月 7 日）。;吉田智聡「「アクサーの氾濫」作戦発動から 1 カ月の中東情勢ーハマースが狙う長期戦とフーシー派の介入ー」『NIDS コメンタリー』第 284 号、防衛研究所（2023 年 11 月 10 日）。

³ “al-I‘lām al-Harbī Yabuthth Mashāhid al-Difā‘āt al-Jawwīya Tusqit Tā’ira Amrīkīya athnā’ Qiyām-hā bi A‘māl ‘Adā’īya,” *Wikāla al-Anbā’ al-Yamanīya*, November 8, 2023, <https://www.saba.ye/ar/news3279166.htm>.

⁴ U.S. Central Command, Twitter Post, December 31, 2023, 09:47 PM, <https://twitter.com/CENTCOM/status/1741259817602429357>.

⁵ “Qā’id al-Qūwāt a-Baḥrīya Yaṭma’inn ‘alā Tāqīm Safīna Jālaksī al-Rāsīya fi al-Sawāḥil al-Yamanīya,” *Wikāla al-Anbā’ al-Yamanīya*, November 22, 2023, <https://www.saba.ye/ar/news3282722.htm>.

⁶ “Crew of Galaxy Leader Granted Limited Contact with Families amidst Efforts for Release,” *Safety4Sea*, December 6, 2023, <https://safety4sea.com/crew-of-galaxy-leader-granted-limited-contact-with-families-amidst-efforts-for-release/>.

⁷ “Release Maybe ‘Imminent’ for Crew of Car Carrier Seized by Houthis,” *The Maritime Executive*, December 29, 2023, <https://maritime-executive.com/article/release-maybe-imminent-for-crew-of-car-carrier-seized-by-houthis>.

⁸ “Galaxy Leader,” *Vessel Finder*, December 31, 2023, <https://www.vesselfinder.com/?imo=9237307>.

⁹ al-‘Amīd Yaḥyā Sarī’, Twitter Post, December 4, 2023, 01:30 AM, <https://x.com/army21ye/status/1731350271966515210?s=20>.

¹⁰ al-‘Amīd Yaḥyā Sarī’, Twitter Post, December 10, 2023, 01:01 AM, <https://x.com/army21ye/status/1733517342905119187?s=20>.

¹¹ “Eilat Port Chief Says Traffic Down 85% since Houthis Put Squeeze on Strait,” *Times of Israel*, December 21, 2023, https://www.timesofisrael.com/liveblog_entry/eilat-port-chief-says-traffic-down-85-since-houthis-put-squeeze-on-strait/.

- ¹² “Statement from Secretary of Defense Lloyd J. Austin III on Ensuring Freedom of Navigation in the Red Sea,” *U.S. Department of Defense*, December 18, 2023, <https://www.defense.gov/News/Releases/Release/Article/3621110/statement-from-secretary-of-defense-lloyd-j-austin-iii-on-ensuring-freedom-of-n/>.
- ¹³ “What Is U.S.-Led Red Sea Coalition and Which Countries Are Backing It?,” *Reuters*, December 22, 2023, <https://www.reuters.com/world/us-red-sea-taskforce-gets-limited-backing-some-allies-2023-12-20/>.
- ¹⁴ George Allison, “Britain Prepares to Strike Houthi Following Attacks on Ships,” *UK Defence Journal*, December 31, 2023, <https://ukdefencejournal.org.uk/britain-prepares-to-strike-houthi-following-attacks-on-ships/>.
- ¹⁵ Catherine Cleveland, and David Pollock, “New Poll Sheds Light on Saudi Views of Israel-Hamas War,” *Washington Institute for Near East Policy*, December 21, 2023, <https://www.washingtoninstitute.org/policy-analysis/new-poll-sheds-light-saudi-views-israel-hamas-war>.
- ¹⁶ “Bahrain: Repression of Pro-Palestine Protests,” *Human Rights Watch*, December 22, 2023, <https://www.hrw.org/news/2023/12/22/bahrain-repression-pro-palestine-protests>.
- ¹⁷ Fathī bin Lazraq, Twitter Post, November 16, 2023, 01:12 AM, <https://x.com/fathibnlazrq/status/1724822803319312666?s=20>.
- ¹⁸ Khalid bin Salman, Twitter Post, November 16, 2023, 12:55 AM, <https://x.com/kbsalsaud/status/1724818521572421964?s=20>.
- ¹⁹ “Saudi Arabia Urges US Restraint as Houthis Attack Ships in Red Sea,” *Reuters*, December 7, 2023, <https://www.reuters.com/world/middle-east/edge-over-red-sea-attacks-riyadh-seeks-contain-fall-out-2023-12-06/>.
- ²⁰ “Ṣan‘ā’ Tuwāṣil Ihrāj al-Duwal wa al-Anzima al-Mutawāṭi‘a ma‘ al-Ṣahāyana fī Ḥiṣār Ghazza,” *Wikāla al-Anbā’ al-Yamanīya*, December 11, 2023, <https://www.saba.ye/ar/news3287597.htm>; “Wazīr al-Difā’ Yu‘akkid anna al-Baḥr al-Aḥmar Muḥarram ‘alā Sufun al-Kiyān al-Ṣihyūnī,” *Wikāla al-Anbā’ al-Yamanīya*, December 6, 2023, <https://www.saba.ye/ar/news3286464.htm>.
- ²¹ “Ra’īs Majlis al-Qiyāda al-Ri’āsī Ya‘qīd Ijtīmā’ Mushtarik bi Qiyādatay al-Sulṭatayn al-Maḥallīya bi Muḥāfazatay al-Mahra wa Ḥaḍramawt,” *Wikāla al-Anbā’ al-Yamanīya*, October 28, 2023, <https://www.sabanew.net/story/ar/102896>.
- ²² “Ra’īs Majlis al-Qiyāda al-Ri’āsī Yuḥadhdhir min al-Tabāṭu’ al-‘Ālamī fī Muwājaha Taḥaddīyāt al-Taghayyurāt al-Munākhīya,” *Wikāla al-Anbā’ al-Yamanīya*, December 1, 2023, <https://www.sabanew.net/story/ar/104035>.
- ²³ Najāt Ra’īs Arkān al-Jaysh al-Yamanī min Muḥāwala Igthiyāl bi Sayyāra Mufakhkhakha,” *al-‘Arabīya*, November 7, 2023, <https://www.alarabiya.net/arab-and-world/yemen/2023/11/07/%D9%86%D8%AC%D8%A7%D8%A9-%D8%B1%D8%A6%D9%8A%D8%B3-%D8%A3%D8%B1%D9%83%D8%A7%D9%86-%D8%A7%D9%84%D8%AC%D9%8A%D8%B4-%D8%A7%D9%84%D9%8A%D9%85%D9%86%D9%8A-%D9%85%D9%86-%D9%85%D8%AD%D8%A7%D9%88%D9%84%D8%A9-%D8%A7%D8%BA%D8%AA%D9%8A%D8%A7%D9%84-%D8%A8%D8%B3%D9%8A%D8%A7%D8%B1%D8%A9-%D9%85%D9%81%D8%AE%D8%AE%D8%A9>.
- ²⁴ “Ra’īs Maṣlaḥa Khafr al-Sawāḥil al-Yamanīya Yaltaqī Mulḥaq al-Difā’ al-Yābānī fī al-Riyāḍ,” *Khafr al-Sawāḥil Wizāra al-Dākhilīya*, October 18, 2023, <https://cg.gov-ye.com/l.html?l=a%2F1%2F36%2Fc%2F1%2F58%2F69%2F8975>.
- ²⁵ 一般に北部の大部分はフシー派の支配下にあるが、ハッジヤ県やサアダ県の一部はアリーミー政権派の支配下にある。
- ²⁶ “Ra’īs al-Arkān Yatafaqqad al-Tashkīl al-Baḥrī fī Mīnā’ Mīdī wa Juzur al-Baḥr al-Aḥmar,” *Khafr al-Sawāḥil Wizāra al-Dākhilīya*, October 21, 2023, <https://cg.gov-ye.com/l.html?l=a%2F1%2F36%2Fc%2F1%2F58%2F69%2F8993>.
- ²⁷ Ri’āsa Maṣlaḥa Khafr al-Sawāḥil al-Yamanīya ‘Adan, Ra’īs Maṣlaḥa Khafr al-Sawāḥil Yukarrim Tāqīm Zawraq al-Dawrīyāt ‘Adan wa Majmū‘a al-Ghawāṣīn,” Facebook, November 25, 2023.
- ²⁸ “al-Ra’īs al-Zubaydī Yattālī ‘alā Jāhizīya al-Qūwāt al-Baḥrīya,” *al-Majlis al-Intiqālī al-Janūbī*, December 9, 2023, <https://stcaden.com/posts/23428>.
- ²⁹ “al-Naqīb: Qūwāt-nā al-Musallāha ‘alā Istīdād Tāmm fī al-Ishām al-Fā’il wa al-Miḥwarī fī Ḥimāya Amn wa Istiqrār Mamarrāt al-Milāḥa al-Baḥrīya fī Bāb al-Mandab wa Khalīj ‘Adan,” *Dir’ al-Janūb*, December 9, 2023, <https://deraalanoob.com/archives/32347>.
- ³⁰ “Ragħm Tahdīdāt al-Ḥūthīyīn: al-Majlis al-Intiqālī al-Janūbī al-Yamanī Musta’idd li al-Ta’āwun ma‘ Isrā’īl,” *I24 News*, December 11, 2023, <https://www.i24news.tv/ar/%D8%A3%D8%AE%D8%A8%D8%A7%D8%B1/middle-east/1702249200-%D8%B1%D8%BA%D9%85-%D8%AA%D9%87%D8%AF%D9%8A%D8%AF%D8%A7%D8%AA-%D8%A7%D9%84%D8%AD%D9%88%D8%AB%D9%8A%D9%8A%D9%86-%D8%A7%D9%84%D9%85%D8%AC%D9%84%D8%B3-%D8%A7%D9%84%D8%A7%D9%86%D8%AA%D9%82%D8%A7%D9%84%D9%8A-%D8%A7%D9%84%D8%AC%D9%86%D9%88%D8%A8%D9%8A-%D8%A7%D9%84%D9%8A%D9%85%D9%86%D9%8A-%D9%85%D8%B3%D8%AA%D8%B9%D8%AF-%D9%84%D9%84%D8%AA%D8%B9%D8%A7%D9%88%D9%86-%D9%85%D8%B9-%D8%A5%D8%B3%D8%B1%D8%A7%D8%A6%D9%8A%D9%84>.
- ³¹ “‘Aydārūs al-Zubaydī: Lā Mānī‘ min al-Taṭbī‘ ma‘ Isrā’īl,” *RT*, February 2, 2021, https://arabic.rt.com/middle_east/1198718-%D8%B9%D9%8A%D8%AF%D8%B1%D9%88%D8%B3-%D8%A7%D9%84%D8%B2%D8%A8%D9%8A%D8%AF%D9%8A-%D9%84%D8%A7-%D9%85%D8%A7%D9%86%D8%B9-%D9%85%D9%86-%D8%A7%D9%84%D8%AA%D8%B7%D8%A8%D9%8A%D8%B9-%D9%85%D8%B9-%D8%A7%D8%B3%D8%B1%D8%A7%D8%A6%D9%8A%D9%84/#.

³² 国民抵抗軍、ティハーマ抵抗軍、巨人旅団によって構成される合同部隊。

³³ “‘Adw Majlis al-Qiyāda al-‘Amīd Tāriq Šāliḥ Yaṭṭali’ ‘alā Jāhizīya Qūwāt Khafr al-Sawāḥil,” *Khafr al-Sawāḥil Wizāra al-Dākhilīya*, October 16, 2023, <https://cg.gov-ye.com/l.html?l=a%2F1%2F36%2Fc%2F1%2F58%2F69%2F8956>.

³⁴ “Khafr al-Sawāḥil Dhū al-Mandab Yuhbiṭ Muḥāwala Tahrīb Adwiya wa Yaḍbiṭ al-Muharribīn,” *al-Sāḥil al-Gharbī*, October 23, 2023, <https://alsahil.net/news29588.html>.

³⁵ “Khafr Sawāḥil al-Baḥr al-Aḥmar Yaḍbiṭ Aslaḥa wa Dhakhā’ir Muharraba li Milīshiyā al-Ḥūthī,” *Wikāla al-Thānī min Dīsambir*, December 23, 2023, <https://2dec.net/news64739.html>.

³⁶ “Nā’ib Ra’īs Majlis al-Qiyāda al-Ri’āsī Tāriq Šāliḥ Yakhtatim al-‘Ām al-Tadrībi li Tashkīlāt Khafr al-Sawāḥil wa al-Qūwa al-Baḥrīya fi al-Mukhā,” *Wikāla al-Thānī min Dīsambir*, December 12, 2023, <https://2dec.net/news64450.html>.

³⁷ “al-‘Amīd Buhayjī Yatafaqqad al-Muqātilīn fi Miḥwar al-Barḥ,” *al-Sāḥil al-Gharbī*, July 1, 2023, <https://alsahil.net/news27835.html>.

³⁸ “Nā’ib Ra’īs al-Jumhūrīya Tāriq Šāliḥ Yaṭṭali’ ‘alā al-Tartībāt al-Nihā’iya li al-Ifitāḥ Maṭār al-Mukhā,” *Wikāla al-Thānī min Dīsambir*, December 4, 2023, <https://2dec.net/news64330.html>.

³⁹ ここでは Google Map の呼称である「航空写真」を用いるが、実際には衛星写真やパンシャープン画像などを用いているとされる。また、本稿中では民間公開サービスを使用しているため、上空から撮影した画像を撮影法を特定せず一般名詞として「航空画像」と呼称する。

⁴⁰ 吉田智聡「12月2日革命の失敗とイエメン国民抵抗軍の伸張—柔軟な生存戦略下での西海岸地域支配—」『中東研究』第548号、2023年、94-104頁。

⁴¹ 「国境なき医師団」によるもの。

“Fīdiyū Abū Ḥūrīya: Maṭār al-Mukhā Injāz Naw’ī wa Risāla Ḥayāt min al-Sāḥil al-Gharbī,” *Wikāla al-Thānī min Dīsambir*, November 25, 2022, <https://2dec.net/news57248.html>.

⁴² “Fīdiyū al-‘Amīd Tāriq Šāliḥ: Ifitāḥ-nā al-Yawm Bāb Jadīd li al-Yaman,” *Wikāla al-Thānī min Dīsambir*, November 24, 2022, <https://2dec.net/news57227.html>.

⁴³ “Fīdiyū wa Ṣuwar: Bi Tawjīhāt wa Ri’āya al-‘Amīd Tāriq Šāliḥ.. Bājil wa al-Wakīl al-Akḥalī Yaḍān Hajar al-Asās li al-Marḥala al-Thālītha min Mashrū’ Maṭār al-Mukhā al-Duwalī bi Da’m min Dawla al-Imārāt,” *Wikāla al-Thānī min Dīsambir*, January 25, 2023, <https://2dec.net/news58334.html>.; “Milaff Muṣawwar 2: Thalātha Marāḥil Najiza bi Ṣadad Tashghīl Maṭār al-Mukhā al-Duwalī,” *al-Sāḥil al-Gharbī*, January 29, 2023, <https://alsahil.net/news25058.html>.

⁴⁴ Ibid.

⁴⁵ 『国際民間航空条約第14付属書:飛行場:国際標準及び勧告方式』などを参照のこと。

⁴⁶ 石津祐介「世界一長い／短い滑走路とは？：空港の「滑走路に必要な長さ」はどう決まるのか」『乗りもののニュース』2017年12月31日、<https://trafficnews.jp/post/79313>。

⁴⁷ ただし、これらの数値はあくまで目安であり、燃料の搭載量や気温や風速などの気象条件にも左右される。

⁴⁸ 「タイズ国際空港」『Google マップ』

https://www.google.com/maps/place/International+Airport+of+Mocha/@13.2967729,43.2317681,3a,75y,90t/data=!3m8!1e5!3m6!1sAF1QipOBJEMpOZOS0nEj_uCB6Mfn90aVSlwsKj12Dc_1!2e10!3e10!6shttps:%2F%2F1h5.googleusercontent.com%2Fp%2FAF1QipOBJEMpOZOS0nEj_uCB6Mfn90aVSlwsKj12Dc_1%3Dw203-h135-k-no!7i720!8i480!4m16!1m8!3m7!1s0x161c5ef6be79f99b:0xab3d04e6231e5db6!2z44K_44Kk44K65Zu96Zqb56m65riv!8m2!3d13.685833!4d44.138889!10e5!16s%2Fm%2F025_nk8!3m6!1s0x16197f883b02c7fb:0x7dbdbd690aef38df!8m2!3d13.2967729!4d43.2317681!10e5!16s%2Fg%2F11ttb1vkj3?authuser=0&entry=ttu.

⁴⁹ “Ṣuwar: al-‘Amīd Tāriq Šāliḥ Yatafaqqad Sīr al-‘Amal fi Manshaāt Maṭār al-Mukhā al-Duwalī wa Yaḥuthth ‘alā Sur’a al-Injāz,” *Wikāla al-Thānī min Dīsambir*, February 5, 2023, <https://2dec.net/news58574.html>.

PROFILE

吉田 智聡

理論研究部社会・経済研究室 研究員

専門分野：中東地域研究（湾岸諸国およびイエメンの国際関係・安全保障）、現代イエメン政治

PROFILE

清岡 克吉

理論研究部社会・経済研究室 研究員

専門分野：防衛産業・装備政策、技術と安全保障、軍備管理

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011

代 表：03-3268-3111（内線 29177）

防衛研究所 Web サイト：www.nids.mod.go.jp